

高橋隆雄先生との思い出

佐藤岳詩, Ph.D.

私は2014年に熊本大学に赴任し、翌2015年、九州医学哲学倫理学会に入会しました。研究や教育、私生活、様々な面で高橋先生にはお世話になったのですが、ここでは、この学会を通じて先生と行った二つの仕事の思い出を記していきたいと思います。

1. 高橋先生の見せたユーモラスな豪腕振り

一つ目は、2016年の九州医学哲学倫理学会第七回大会の開催校です。高橋先生が大会長で、私は永田先生や門岡先生とともに高橋先生をサポートする立場でした。開催校にはいくつか細々とした仕事がありますが、そのうちの一つに特別講演の演者の選定があります。私たちに意見がないのを見回すや、高橋先生は「一番安上がりで、しかも交渉等の手続き不要な私が話すことにしたいと思います」と仰って、すっと演者を買って出てください、発表内容もしかじかの方向にしようかと思えますと、あっという間に決めてくださいました。「代わりに佐藤先生も何か発表するんですよ、いいですね。あと、お金の手続きをしておいてください」と笑っておられました。先生らしいユーモラスで豪胆な進め方でした。

その際の高橋先生のご発表は「ヒト-動物キメラ研究と倫理学への挑戦」というタイトルのものでした。ちょうど、豚の体内で人間の臓器を育てる研究の認可が下りた折りで、そのことの倫理的是非を問う発表となっており、多くの聴衆を得て議論が盛り上がったことを覚えています。

2. 知行合一の実践倫理学者

二つ目は、厳密には九州部会での仕事ではないのですが、2018年に行われた日本医学哲学倫理学会の

生命倫理公開講座です。こちらは国の科学研究費の助成を受けて行ったもので、比較的大きなお金が動く、大がかりなものでした。県外からも先生をお招きし、大学を飛び出して一般の方も来場しやすい市中の県民会館で行いました。テーマは「災害と倫理」で、熊本でやるのであればそれがよかろうと高橋先生が考えてくださいました。

開催に当たっては色々考えることがあって大変だったのですが、一つの課題はどうすれば一般の方に多く来場してもらえるかということでした。私たちがああでもないこうでもないと相談していると、高橋先生は新聞に広告を出すのはどうかと仰いました。そんなことはしたことがないので躊躇っていると、新聞社に知り合いがいるからといってすぐに電話をかけて約束を取り付けてしまうのです。この行動力！と驚嘆したものです。

ただ、この間の公開講座の打ち合わせの中では、先生から体調を崩して入院されている旨のご連絡をいただくことがありました。後で知ったところでは、ちょうどガンが判明したのがこの頃でした。しかし、当時の私は先生のご体調がそれほど深刻だとはまったく思っておらず、仕事を任せて申し訳ないと仰ってください先生に、公開講座が終わったら美味しいものを食べさせてください！などと呑気に答えていました。

公開講座には高橋先生も登壇され、「災害と共にある時代の自助、共助、公助—共災の時代の倫理—」というタイトルで発表されました。2016年の熊本地震後、先生は自ら地域の防災グループに入り、資格を得て活動するなど、机上の議論に留まらない行動を行っておられました。その経験を元に話される言葉は確かな説得力をもっており、同じく被災した人がほとんどであったらろう会場の聴衆の心をしっかりと掴んでいたように思います。

3. 今にして実感する遺文の重み

今回、そのときの配布資料を読み返してみました。

基本的にさまざまな災害を避けることができない日本において、どのように自助、共助、公助を組み合わせ、それら災害に向き合っていくかということ、一般の方でも分かるように丁寧に明快に論じた発表原稿です。目をひいたのは、全体の結びの最後の一段落です。「これら自然、気概、諦念の三つの徳がうまく噛みあうときに、わたしたちは、きびしい現実を知った上でなお、本当の意味で充実した毎日を送ることができるでしょう。これはまた、病気とつきあうしかたにも通じます」。この箇所は、実質的にこの発表原稿の最後の一文なのですが、それまで言及されることのなかった「病気」という言葉が本当に唐突に出てきます。今から振り返ると、ここにこの一文を置かれたことの重みを考えてしまいます。

4. 含蓄に富む三徳（自然、気概、諦念）の教えを噛み締めて

最後におめにかかったのは2020年の1月15日でした。すっかり痩せておられましたが、気力はおよそ衰えているようには見えず、それが最後になるとは思えませんでした。その後も3月には研究室の紀要論文の原稿をいただき、来年も原稿をお願いしますなどと言っていた矢先のことでした。

先の自然、気概、諦念の徳のことを、高橋先生は次のように記しています。

まずは、きびしい現実をみすえ、できるかぎりの準備をすること（自然）、笑い事ではないことを笑って話す闊達さ、強さをもつこと（気概）、そしてできるかぎりの準備をした上で生じてしまった被害を受け入れること（諦念）が必要です。さきほど、日ごろの防災準備や訓練は徳に当たると述べました。ここでの「自然」「気概」「諦念」はそのような徳よりもさらに広い意味で、共災の時代を生きる徳ということができません。

災害と向き合う仕方、病気と向き合う仕方として、高橋先生はこの文を書かれましたが、この三つの徳は人との別れとの向き合い方にもあてはまることなのではないかと思います¹。そもそも災害には人との別れも含まれるのだから当然でしょう、と先生はおっしゃるかもしれませんね。準備はもうできませんが、せめて気概と諦念をもって向き合えるよう努力したいと思います。ご冥福を心よりお祈りいたします。

（さとう たけし 専修大学文学部准教授）

¹ 高橋先生の著書『「共災」の論理』（2013、九州大学出版会）では、この三つの徳は九鬼周造からとったものとされています（同書 74-81 頁）。